

カーネギー国際平和財団 広島市長メッセージ  
ワシントンD.C. 2018年6月11日

はじめに、カーネギー国際平和財団の皆様が、平和首長会議の活動に関心を持ち、この機会を設けてくださったことに感謝申し上げます。

私が会長を務める平和首長会議は、7,500以上の世界中の加盟都市が活動を展開している超党派の国際組織で、米国においても213都市に加盟していただいています。「核兵器のない世界の実現」と「安全で活力のある都市の実現」という二つの目標を掲げ、私たちの最終ゴールである世界恒久平和へ向けて協力しながら取組を推進しています。

本日は、被爆地の市長として、被爆者の思いを皆様にお伝えすることから始めたいと思います。ここに広島からお持ちした写真は、被爆地の私たちが絶対悪と呼ぶ核兵器がもたらした人や自然環境に対する被害の状況です。私たちは、このような被爆の実相をまず世界中の人々に知ってもらいたいと考えています。核兵器の使用を合理化するどのような理由を述べようとも、これが核兵器が人類にもたらした結果であるとの厳粛な事実が変わりません。

被爆の実相を広く世の中に知らしめれば、被爆者の「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」との切なる思いも理解されるようになります。そして、世界恒久平和は、多様性の尊重と、人間家族の一員としての同胞意識に基づく共通の未来ビジョンを育むことなくしては実現できないことが更に理解されるようになると思います。このような意識を育むことができれば、世界中で起きている多様で複雑な問題の解決にも繋がると信じています。

世界の人々の大半が都市に住んでいることに鑑みれば、私たち首長はこれらの問題解決に大いに貢献することができると考えています。私たちはグローバルな視点を持ちつつも、その根本には、個々の市民が持つ需要や欲求、不安に対する深い理解があります。首長である私たちは現実的な問題解決者であり、ますます相互依存を深める世界において、国粋主義や軍国主義の台頭、セクト主義の先鋭化、外国人排斥の動き等に対応するために、自らのスキルを活かしたいと思っています。

現下の国際情勢を見てみると、米朝会談が北東アジア情勢にどう影響するのか、誰も予測が立てられない状況です。また、中東におけるイランとの核合意に関する動向も、明確な見通しは立っていません。

世界の為政者がこれらのグローバルな問題を平和裏に解決し、核兵器のない世界実現に向け、リーダーシップを発揮することを心から期待しています。また、ここにおられる皆様方には、被爆者の長年にわたる切実な平和の訴えを再確認していただきたいと考えています。

核兵器の非人道性についての認識が国際的に広がるとともに、核兵器のない世界を希求する声が高まっています。それにもかかわらず、その実現に向けた進展は十分ではなく、それどころか後退すらしかねない状況に私たちは直面しています。今こそ現状打破が必要です。皆様方がこの危機感を共有してくださることを強く願い、この場に立っています。

第一次世界大戦終結から 100 年に当たる今年、私たちは、その時の教訓が忘れ去られようとしているのではないかと自らに問い直さねばなりません。第一次世界大戦の後には、更に悲惨な第二次世界大戦が始まってしまったわけですが、今後、再び人類の滅亡さえも招きかねない世界大戦を起こすことがあってはなりません。自分あるいは自国さえ良ければ良いという視点に立つのではなく、考え方や利害を異にする者同士が真剣に協議し、平和裏に問題の解決を図っていくことの重要性を、今一度思い起こそうではありませんか。

朝鮮半島の核問題の平和的な解決を目指す上では、堪えがたい破壊をもたらすだけのいかなる核の使用も絶対に避けなければならないと思っています。1950年に始まった朝鮮戦争は休戦状態にありますが、未だに戦争終結には至っていません。関係国の真剣な対話を通じて、武力衝突を回避し、戦争を終結させる本格的な和平努力が必要です。この点に着目し、数百年前に行われた日朝間の武力紛争を解決し、長期にわたる平和交流の基礎を作った外交努力の史実を参考までにご紹介したいと思います。

今から 400 年以上前、豊臣秀吉は朝鮮を領土にしようと軍隊を送り込みました。二度の大規模な朝鮮侵攻は、朝鮮に多大な被害を与えただけでなく、秀吉政権にも大きな損害をもたらしましたが、秀吉の死によってこの戦争は終結し、両国の国交は断絶しました。

朝鮮の僧侶、四溟堂松雲（しめいどう しょううん）は、秀吉の朝鮮出兵時に、義勇軍を指揮して秀吉軍の撃退に貢献するとともに、秀吉軍の陣地に乗り込み、現場の指揮官との和平交渉の先鞭を付けた人物です。この経験を買われ、日本の次代将軍の徳川家康との和平交渉をする非公式の使節に選ばれて日本に赴き、学識文化人であるだけでなく、政策、外交のブレーンとして将軍とも繋がりが深かった多くの京都の高僧と交歓し、家康やその側近達の信頼を得た結果、日朝の和平交渉を成功させました。

四溟堂松雲は、相手国の懐に入って交渉を進める事を厭わず、外交談判を通じて恒久平和を実現するという使命を實踐し、朝鮮から連れ去られた民間人捕虜約 3,000 名の送還を実現しただけでなく、日本が鎖国時代であったにもかかわらず、以後 200 年以上続いた朝鮮から日本への朝鮮通信使の派遣を通じた平和的交流の実現にも大きく貢献しました。

核軍縮の歴史においても、貴国の為政者の尊いイニシアティブの先例があったことを改めて想起したいと思います。二つの核超大国の指導者であるケネディとフルシチョフが1963年に部分的核実験禁止条約に合意し、またレーガンとゴルバチョフが1987年に中距離核戦力全廃条約に合意したように、過去の核軍縮措置も国際社会の緊張が極まる中で為政者が立場を超えて歩み寄ることにより実現したという歴史的事実があります。世界の、とりわけ核保有国の為政者には、それらの先例に倣い、リーダーシップを発揮してもらいたいと考えています。また、過去の核軍縮実現の背景には、例外なく幅広い市民社会の核軍縮を求める声の結集があったことも忘れてはなりません。コフィ・アナン元国連事務総長は、市民社会について語る際、しばしば「超大国に並ぶ強大な力を持つもの」と表現しました。市民社会は、世界規模の課題、例えば核兵器のない世界の実現もその一つですが、そうした課題解決に大きな影響力を与えうるのです。

今、世界の為政者に求められているのは、立場を超えた対話を重ねることです。「人類愛」や「寛容」の精神の下に核抑止政策と決別し、自国のためのみの安全保障ではなく、より長期的な視点に立って、核兵器に頼らない、人類のための協調的な安全保障を目指してもらいたいと考えています。私たちは、世界の為政者が勇気と洞察力を持って、核兵器廃絶に向けて行動できるよう、市民社会が連帯し、そうした為政者を後押しするような環境作りをしていきたいと考えています。この偉大な目標が実現され、全ての人々が平和と安全を享受できるようになるその日まで、私たちは休むことなく進み続けます。

人類が直面する深刻な課題解決に向け、長年にわたり取り組んでこられたカーネギー財団において、本日こうしてスピーチさせていただいたことは私にとって本当に光栄なことです。貴財団は、核不拡散、軍縮、武器管理の分野において、若者への啓発を行い、上の世代にやり残した仕事を想起させ、国会議員に議論と法律制定を促し、メディアに対してはこの問題について広く報道することを奨励してこられました。平和首長会議としては、多様な分野における貴財団の取組を全面的に支持するとともに、私たちが共有する崇高な目標の達成に向け、貴財団のますますのご活躍を祈念します。

最後にお伝えしたいのは、美しく、歴史ある我が街広島を、ここにおられる皆様全員に訪れていただきたい、ということです。広島を訪れた人々は皆、核兵器の恐ろしさを胸に刻むとともに、圧倒的な困難に直面した時にも人間性が勝利する、ということを深く理解し、別人格となって街を後にします。樹木でさえ蘇り、子孫を残し、それらの子孫は現在世界中で育てられています。広島を訪れる人々は、私たちが共通の人間性と自然との絆に目覚めることは、未来への大いなる希望をもたらすということを理解するのです。日本を始めとする世界各国には「夜明け前が一番暗い」ということわざがあります。私たち自身と後に続く世代のために、この大切な仕事に共に取り組み、平和で、安全で、公正な世界への道を照らそうではありませんか。